

唯識三十頌證典考

保坂玉泉

『唯識三十頌』は頌數多きにあらず文言亦簡潔なれども義理甚だ豊富唯識の法門盡さざるなく、組織殊に整然一大佛教を結構して餘蘊なし。然れば世親以後の唯識は新に本頌を以て淵源とし之が釋家三國に踵いで起り一大系統を成せることは何人も知る所なり。然るに斯かる重要な本頌古來未だ文献の典據を究めず従つてその思想の由來又漠然たり。本頌は世親晚年入滅前の作と稱せられ唯だ頌のみあつて長行釋を缺くが故にその證典を探くるに由なし、僅かに『成唯識論』に古典を引證するものあり稍々暗示を得るも本頌全般に涉るにあらず遺憾多し。頃日讀書の毎に意之に用ゐ、本頌以前の經論に類文同義を發見し比較對照するに、聊か證典に擬するを得たり、以下引證し學者の參考に供せんとす。

(一) 由假說我法 有種種相轉 彼依識所變 此能變唯三

「善男子我説識所緣唯識所現故」(解深密經第三、唯識論第二引)。此は頌の第二第三句に當る。

「如愚所分別 外境實皆無 習氣擾濁心 故似彼而轉」。(厚嚴經伽陀。唯識論第二引)。

「爲對遣愚夫 所執實我法 故於識所變 假說我法名」。(厚嚴經伽陀。唯識論第二引)。此の文本頌と最も親

し、殊に後二句は本頌の第一第三句に完く同じ。

(二) 謂異熟思量 及了別境識 初阿賴耶識 異熟一切種

「又若略說阿賴耶識用_ニ異熟識一切種_ニ爲_ニ其自性_ニ」。(攝大乘論本上)

「但是異熟識是一切種子識」。(同上)

「安_ニ立此相_ニ略有_ニ三種_ニ一者安_ニ立自相_ニ二者安_ニ立因相_ニ三者安_ニ立果相_ニ」。(同上)阿賴耶識を三相を以て解釋するは『攝論』の今文に由る。頌の「初阿賴耶識」は自相、「異熟」は果相、「一切種」は因相なり。

(三) 不可知執受 處了常與觸 作意受想思 相應唯捨受

阿賴耶識緣境微細、世聰慧者亦難了故」(瑜伽論五十一)

「若略說_ニ阿賴耶識_ニ由_ニ於_ニ二種所緣境_ニ轉_ニ由_ニ了_ニ別_ニ內_ニ執_ニ受_ニ故_ニ由_ニ了_ニ別_ニ外_ニ無_ニ分_ニ別_ニ器_ニ相_ニ故_ニ」。(同上)此二文は頌の「不可知執受處了」に當る。

「阿賴耶識與_ニ五遍行心相應所_ニ恒共相應謂作意觸受想思_ニ……又阿賴耶識相應受一向不苦不樂」。(同上)不苦不樂とは捨受なり、此文は本頌の「常與觸」以下と全同なり。

(四) ^A 是無覆無記 觸等亦如是

「……無記性攝當_レ知餘心法行相亦爾」(瑜伽論五十一)

「是故異熟識唯無覆無記」(攝大乘論本上)

(四) ^B 恒轉如_ニ暴流_ニ

「譬如_ニ大瀑水流_ニ……然此瀑水自類恒流無斷無盡……似_ニ瀑流_ニ阿陀那識……一切種子如_ニ瀑流_ニ」(解深密經卷一)

(四)C 阿羅漢位捨

「云何無爲阿羅漢果。謂……破阿賴耶。」(婆娑論六十五)。「婆娑論」等小乘經論に出づる阿賴耶は能執の心にして後の如き所執藏にあらず、然れども阿羅漢果の位に捨することは同一一般なり。

「或有俱不成就。謂阿羅漢若諸獨覺不退菩薩及諸如來入滅盡定處無餘依涅槃界。」(瑜伽論五十一)。「瑜伽」には轉識と阿賴耶識との有無に付て四句分別を作す、此文はその第四雙非の句なり。即ち阿羅漢位には阿賴耶を捨す。

(五) 次第二能變 是識名末那 依彼轉緣彼 思量爲性相

「山有阿賴耶識故得有末那。」(瑜伽論五十一)。頌の第三句に當る

「若有心位若無心位常與阿賴耶識一時俱轉。緣阿賴耶識以爲境界執我起慢思量行相。」(同上) 頌と全く同意なり。

「末那名意於一切時執我所及我慢等思量爲性。」(瑜伽論六十三)

「無間義故思量義故。」(攝大乘論本卷上)

「何等爲意。謂一切時緣阿賴耶識思慮爲性。」(集論卷一)。此文は前說瑜伽六十三の文と殆ぼ同し。

(六) 四煩惱常俱 謂我癡我見 並我慢我愛 及餘觸等俱

「又前說末那恒與阿賴耶識俱轉乃至未斷。當知常與俱生任運四種煩惱一時相應。謂薩迦耶見我慢我愛及與無明」(瑜伽論五十一)。

「末那恒與四種任運煩惱相應於一切時俱起不絕謂我所行薩迦耶見我慢我愛及不共無明」(同上六十三)。

「染汚意與四煩惱恒相應。一者薩迦耶見二者我慢三者我愛四者無明」(攝論本卷上)。

「與四煩惱恒相應謂我見我愛我慢無明」(集論卷一) 四文全く同じ、頌之より出でたる疑なし。

(七) 有覆無記攝 隨所生所繫 阿羅漢滅定 出世道無有

「是有覆無記性」(瑜伽論五十一)。

「唯是隱沒無記性」(同 六十二)。

「此意染汚故有覆無記性……此意一切時微細隨逐故」(攝論本卷上)。此文後半は頌の第二句と同じ。

「已離欲者尙現行故隨所生處此煩惱即此地攝……出世道現在前時此諸煩惱不得現前」(瑜伽論六十三)。

「此意遍行一切善不善無記位。唯除聖道現前若處滅盡定及在無學地」(集論卷一)。二文同じく頌の第二句以下に該當す。

「謂無想定染意所顯非滅盡定」(攝論本卷上)。

(八) 次第三能變 差別有六種 了境爲性相 善不善俱非

第三能變は六識說なり六識說は唯識以前通途の說今強て典據を求むるにも及ばず。

(九) 此心所遍行 別境善煩惱 隨煩惱不定 皆三受相應以下

三十頌第九頌以下第十四頌迄は六位五十一の心所を列す。此五十一心所は百法の一部にして、近くは『百法明門論』遠くは『瑜伽』卷一等に依ること論なし、今又敢て擧げず。

(一五) 依止根本識 五識隨緣現 或俱或不俱 如濤波依水

「如_レ是廣慧由_下似_レ瀑流_二阿陀那識爲_レ依止_一爲_レ建立_上故若於_レ爾時_二有_レ一_レ眼識生緣現前_一即於_レ其時_二一_レ眼識轉若於_レ爾時_一乃至有_レ五識身生緣現前_一即於此時五識身轉」(解深密經卷一)。頌の根本識とは阿頼耶識阿陀那識の異名なり。此文の「阿陀那識爲_レ依止_一」とは頌の「依止根本識」と同意、其他は頌の第二第三兩句に當る。

「由_レ此四種因緣力_レ故滅識轉變識波浪生譬如_レ瀑流相續不斷_一……由_レ境界風_二飄_レ靜心海_一起_レ識波浪_二相續不斷_一。因緣相作不_レ相捨離_一不_レ一_レ異如_レ水與_レ波。由_レ業生_レ相深起_レ繫縛_二不能_レ了_レ知色等自性_一五識身轉。彼阿頼耶終不_レ言_レ我生_二七識_一。七識不_レ言_下從_レ頼耶_一生_上。但由_レ自心執_レ取境相_二分別而生_一」(般若譯四十華嚴第九)。

「水流處藏識轉識浪生……外境界風飄_レ蕩心海_二識浪不_レ斷_一因所作相異不_レ異合_レ業生_レ相深入_二計著_レ不能_レ了_レ知色等自性_一故五識身轉」(四卷楞伽經第一)。「十卷楞伽」第二、「七卷楞伽」第二の相當の文亦大に同じ。

「又如_下於_レ一_レ瀑流_一有_レ多波浪_一一時而轉互不_レ相違_上……如_レ是於_レ一_レ阿頼耶識_二有_レ多轉識_一一時俱轉當_レ知更互亦不_レ相違_一又如_下一_レ眼識於_レ一_レ時間於_レ一_レ事境_一唯取_レ一_レ類_二無_レ異色相_上……」(瑜伽論卷五十一)。以上「深密」「華嚴」「楞伽」「瑜伽」等の諸文を對照するに同一系統に屬するもの、如し。而して前掲第十五頌が斯等の文を約言せることも疑なし。唯識思想史上重要な資料なり。

(一六) 意識常現起 除_下生_二無想天_一 及無心_二定 睡眠與_中悶絕_上

「或有_下成_レ就阿頼耶識_一非_レ轉識_上。謂無心睡眠無心悶絕入_レ無想定_一入_レ滅盡定_一生_レ無想天_一。(瑜伽論五十一)。此文も先に出せる阿頼耶識と轉識との有無の四句分別の第一句なり。頌文と全同なること可知。

(一七) 是諸識轉變 分別所分別 由_レ此彼皆無 故一切唯識

「善男子我説識所緣唯識所現故」(解深密經卷三、攝論本卷中)

「善男子此中無有少法能見少法然即此心如生時即有如如是影像顯現」(解深密經卷三、唯識論七引)。

「心意識所緣皆非離自性故我説一切唯有識無餘」(厚嚴經、唯識論七引)。

「虛妄取自心是故心現生外法無可見是故説惟心」(入楞伽經第九、唯識論二引)。

「亂相及亂體應許爲色識及與非色識若無餘亦無」(攝論本中、唯識論七引)。

「由此道理菩薩於其一切識中應可比知皆唯有識無有境界」(攝論本中)。

「復次云何安立如是諸識成唯識性。略由三相二由唯識無有義故二由二性有相有見二識別故三由種種種種行相而生起故。所以者何此一切識無有義故得成唯識」(攝論本中)。唯識の理を説ける文は此外『十地經』『華嚴經』『楞伽經』『維摩經』『阿毘達磨經』等甚だ多し。但し頌文に最も親しきは前掲の諸文なるべし。

(六) 由一切種識 如是如是變 以展轉力故 彼彼分別生

(元) 由諸業習氣 二取習氣俱 前異熟既盡 復生餘異熟

「於後法中爲彼得生攝殖彼種子者謂彼熏習種類能引攝常來異熟無記」(瑜伽論五十一)。これは第十九頌に當る。

(三) 由彼彼遍計 遍計種種物 此遍計所執 自性無所有

「云何諸法遍計所執相。謂一切法名假安立自性差別乃至爲令隨起言説」(解深密經卷二)。
「此中何者遍計所執相。謂於無義唯有識中似義顯現」(攝論本中)。

「若遍計所執自性依依他起實無所有似義顯現……無量行相意識遍計顛倒生相故名遍計所執自相實無唯有遍計所執可得」(同上)。前掲第二十頌は完く『攝論』の斯文に同じ

(三) A 依他起自性 分別緣所生

「云何依他起相。謂一切法緣生自性」(解深密經卷二)。

「此中何者依他起相。謂阿賴耶識爲種子虛妄分別所攝諸識」(攝論本卷中)。

「若依他起自性……從自熏習種子所生依他緣起故」(同上)。

(三) B 圓成實於彼 常遠離前生

「云何諸法圓成實相。謂一切法平等眞如」(解深密經卷二)

「此中何者圓成實相。謂即於彼依他起相由似義相永無有性」(攝論本卷中)。

「圓成實自性是遍計所執永無有相」(同上)。遍依圓三性の説は前掲の如く『深密』『攝論』に據る。『瑜伽』亦た大に同じ。

(三) 故此與依地 非異非不異 如無常等性 非不見此彼

「復次此三自性爲異爲不異。應言非異非不異」(攝論本卷中)。三自性の不一不異なる關係に就て『解深密經』にも『攝論』にも所説あり。

「非不見眞如而能了諸行皆如幻事等雖有而非眞」(厚嚴經、唯識論八引)。此文頌の後半と全同。

(三) 即依此三性 立彼三無性 故佛密意説 一切法無性

(四) 初即相無性 次無自然性 後由遠離前 所執我法性

「然由有情於依他起自性及圓成實自性上增益遍計所執自性故我立三種無自性性」(解深密經卷二)

「勝義生當知我依三種無自性性密意說言一切諸法皆無自性所謂相無自性性生無自性性勝義無自性性」(同上)。

二頌は此文に據る。

「復次三種自性三種無自性性。謂相無自性性生無自性性勝義無自性性。由相無自性性故遍計所執自性說無自性。

由生無自性性故及勝義無自性性故依他起自性說無自性。非自然有性故非清淨所緣性故。唯由勝義無自性性

故圓成實性說無自性。何以故由此自性亦是勝義亦一切法無自性性之所顯故」(瑜伽論七十四)。

(五) 此諸法勝義 亦即是眞如 常如其性故 即唯識實性

「一切諸法法無我性名爲勝義亦得名爲無自性性是一切法勝義諦」(解深密經卷二)。

「云何諸法圓成實相。謂一切法平等眞如」(同上)。

(六) 乃至未起識 求住唯識性 於三取隨眠 猶未能伏滅

(七) 現前立少物 謂是唯識性 以有所得故 非實住唯識

「菩薩於定位。觀影唯是心。義相既滅除。審觀唯自想。如是住內心。知所取非有。次能取亦無。後觸無所得」

(分別瑜伽論、攝論本卷中、唯識論卷九引)。これ彌勒慈尊教授偈と云ふものなり。前二頌は五位の中資糧位と

加行位とを明す。此教授偈は加行位を説けるものなり。

「若知諸義唯是言。即住似彼唯心理」(大乘莊嚴經論、攝論本卷中引)。是れ五現觀の伽陀にして加行位を説けり、

故に二十七頌の前半に當る。

(元) 若時於所緣 智都無所得 爾時住唯識 離二取相故

「由此因緣住一切義無分別名於法界中便得現見相應而住爾時菩薩平等平等所緣能緣無分別智已得生起由此此菩薩名已悟入圓成實性」(攝論本卷中)。

「便能現證眞法界。是故二相悉蠲除。體知離心無別物。由此即會心非有。智者了達二皆無。等住二無眞法界」(大乘莊嚴經論、攝論本卷中引)。

(元) 無得不思議 是出世間智 捨二麤重故 便證得轉依

「善男子此諸地中有二十二種愚癡十一種麤重爲所對治。謂於初地有二十種愚癡……及彼麤重爲所對治……於如來地有二十種愚癡……及彼麤重爲所對治」(解深密經第四)。

「若於骨鹿重斷者我說永離一切隨眠位在佛地」(同上)。

「善男子若於諸地波羅蜜多善修出離轉依成滿是名如來法身之相。當知此相二因緣故不可思議。無戲論故無所爲故」(同卷五)。

「金剛喻定破滅微細難破障故。此定無間離一切障故得轉依」(攝論本卷下)。

「慧者無分別智力。周遍平等常順行。滅依榛梗過失聚。如大良藥銷衆毒」(大乘莊嚴經論、攝論本卷中)。これ修習位を説けり。

(三) 此即無漏界 不思議善常 安樂解脫身 大牟尼名法

「應レ知法身略有ニ五相。一轉。依爲レ相……二白。法所レ成爲レ相……三無ニ爲レ相……四常。住爲レ相……五不可思議爲レ相……」〔攝論卷下〕。

「世尊聲聞獨覺所得轉依名ニ法身。不。善男子不レ名ニ法身。世尊當レ名ニ何身。善男子名ニ解脫身。由ニ解脫身。故說一切聲聞獨覺與ニ如來ニ平等平等。由ニ法身。故說レ有ニ差別。如來法身有ニ差別。故無量功德最勝差別算數譬喩所レ不能レ及」〔解深密經卷五〕。

「如來無垢識。是淨世無漏界。解ニ脫一切障。圓鏡智相應」〔如來功德莊嚴經、唯識論三引〕。

「佛說妙法善成立。安ニ慧并根法界中。了ニ知念趣唯分別。勇猛疾歸ニ德海岸」〔大乘莊嚴經論、攝論本卷中〕。

上來の比較對照に依りて『三十頌』の證典を殆ぼ探り得たるが如し。即ち『三十頌』は經としては『解深密經』『如來出現功德莊嚴經』『楞伽經』『厚嚴經』等所謂唯識所依の六經に據り、特に正所依の『解深密經』に依るもの多く、論としては『瑜伽師地論』『攝大乘論』『阿毘達磨集論』『大乘莊嚴經論』に依り、特に『瑜伽』『攝論』に依る所多し。畢竟世親が『三十頌』著作の主要なる材料は『深密』『瑜伽』『攝論』の三者なりしこと推想するに難からず。『唯識論』所依の六經十一論は大體に於て『三十頌』の所依なりとも觀ることを得べし。